

◆書評◆

鄭喜鎮編 権金炫恰／鄭喜鎮／欄碧昀／ルイン著
申琪榮監修／金李イスル訳

『#MeTooの政治学

コリア・フェミニズムの最前線』

(大月書店 2021年 ISBN 978-4-272-35049-0 2400円+税)



伊田 久美子

(大阪府立大学 名誉教授)

本書は韓国の女性運動第1世代(386世代)の後に「ヤング・フェミニスト」として登場した世代の論者たちによるフェミニズム運動論である。韓国社会を大きく揺るがしている#MeToo運動はフェミニズムの新段階である、と本書は分析する。386世代との差異の表明は新たな必然性を伴う大きな物語を形成しようとする意志に支えられている。それは韓国のフェミニズム運動を根底から刷新しうる力を発揮していくことになる。

フェミニズムにおいて運動と研究は同じものである、と著者たちは主張する。こうした主張は議論ばかりで行動しない研究者への批判の言説と理解されがちだが、「机上のフェミニズム」と呼ばれる理論構築は認識枠組みを変えていく運動そのものであり、むしろそれが「不足している」とする本書の主張は新鮮である。この認識論は必然的に近代国家を相対化し、それを超える理論である。フェミニズム

が対峙しているのは近代国家の土台を構成する家父長制に基づくジェンダー秩序だからである。

本書が暴き出す韓国社会の構造は「男性連帯」(ホモソーシャリティ)をゆるぎない土台としている。これを暴き、男性連帯社会の激しい反撃(バックラッシュ)を引き起こした#MeTooは、堅固な男性連帯社会への女性たちの大衆レベルでの異議申し立てに他ならない。#MeToo運動を「革命」と呼び、それ以上に的確な命名はない、と述べる編著者の鄭喜鎮は、「革命」の本来の意味を明確に思い出させる。性加害は不法行為であると定める法治国家において、不法行為の通報が「革命」であり、人生を賭すほどの勇気が必要な社会に私たちは生きている。法治国家が対応しない犯罪に対する無力な人々の僅かな、しかし夥しい力の行使は、近代国家の土台である法治制度そのものの告発であり「れっきとした革命」(80頁)である。

韓国で女性が自らの性被害を告発したのはこれが初めてではない。元慰安婦の金学順さんをはじめ、多くの女性たちがこの人生を賭した闘いを繰り返してきた。しかし今日の新局面を可能にしたのはフェミニズムの「大衆化」である、と鄭は述べる。権力を持たない女性個人の性暴力の告発である #MeToo を支持する夥しい女性たちの力の結集はフェミニズムの「大衆化」なしには実現しなかっただろう。「大衆」としての女性が告発によって国家と対峙する「革命」は女性の個人化を許容した新自由主義文化の家父長制への少しの間の勝利によって可能になった、とする鄭の指摘は重要である(81頁)。近代国家の単位である男性が代表する家族から、独立した個人としての女性主体が登場し、家族と国家を貫く家父長制を告発した第2波フェミニズム以降、市民レベルでの国際的な議論と交流が一気に活性化していった背景に、やはり新自由主義の浸透と国家主権の相対化の影響を見ないわけにはいかない。フェミニズムとは家族や国家の土台である家父長制と必然的に対峙する思想であり実践である。韓国の女性運動の #MeToo 運動としての展開もまた、近代国家を相対化する歴史的流れの中に位置づけられるのではないだろうか。

本書は韓国における夥しい #MeToo の代表的事例のひとつとして安熙正事件に焦点を当てている。権金炫侗の論文は、

一審で無罪となった安の裁判(2019年2月1日の控訴審判決では懲役3年6カ月の実刑判決が言い渡された)の傍聴を中心に、進歩的とみなされてきた386世代の男たちの対応に現れる権力構造を理論的に、しかしながら強い怒りを込めて分析している。また386世代のフェミニストを含む一部の女性への疑問も率直に表明している。「運動内部またはその周辺で韓国社会の諸問題に関心を持つ献身的な地域活動家、人権活動家として活動している女性の方がむしろ、この問題についての判断を迷っていた」と述べ、彼女らが「性暴力の問題についてだけは『距離を置いている』」とも指摘する(65頁)。

権金は、安熙正裁判の一審裁判所が被害者キム・ジウンに対して「性的自己決定権をなぜ行使しなかったのか」と執拗に尋ねながら、安に対してはその行為についてまったく尋ねない非対称性に異性愛男性の性的欲望を正常で自然なものとする家父長制構造を指摘する。性暴力特別法の存在する今日の韓国で、被害者だけが執拗に同意や抵抗の有無を問われる状況は何ら変化していないのである(93頁)。

鄭が家庭内暴力と並んで「不可能な #MeToo」と指摘するのは性売買や性産業の場で起こる暴力である。鄭は家族と性売買の二つの制度は連続線上にあり、家父長制を構成している、と述べ(95頁)、女性もまた家父長制に利害関係があることを指摘する(98頁)。女性を妻と娼

婦に分断する家父長制の古典的な構造は過去のものではない。韓国の古典小説『春香伝』のテキスト分析を通じて、1994年まで性暴力の保護法益であった「貞操」と、新たに保護法益となった「性的自己決定権」を論じる欄砦昉の論文は、李氏朝鮮時代からの「貞操」のあり方が今日なお不変に感じられる社会状況を説得的に提示している。

フェミニズムとクィアのジェンダー問題としての連続性を論じるルインの論文は、女性に対する暴力の問題をめぐりフェミニズムとクィアを分離しようとする動きを批判し、ジェンダー論としての包括的理論構築を試みている。本書は2001年に起こった韓国女性学会におけるホモフォビアと言える報告問題に触れ、また近年の一部フェミニストのトランス排除的主張についても研究し公的な議論の場の再構築についての考察が必要であると述べる(28-29頁)。ジェンダーはマジョリティとマイノリティの非対称な二項対立の原型である。フェミニズム

が進展させてきたジェンダー論は近代社会を構成してきたあらゆる二項対立をゆさぶりマジョリティを相対化する作用を發揮した。その意味で本書が主張する運動としての認識論は必然的にさまざまな非対称性の交錯を伴い、近代国家を転覆させうる革命的潜在力を持つのである。

本書は、学会の外で社会運動としての執筆を目標とする「トランス会」の学会誌第4巻である。本書刊行後にも#MeTooは続き、女性運動をも含めて韓国社会を根底から揺るがしている¹。この世代のフェミニストとしての研究活動の困難と、すでに同じ試みに挑戦していた先輩フェミニストたちへの敬意の表明は感動的である(32頁)。当然ながら運動の「継承」とは学習を超えた何かである。継承が敬意と学習にとどまる限り成長はない。長い歴史と多くの課題を立場の違いとともに共有している隣国のフェミニズムの多様な展開をもっと深く知ることにより、私たちは日本のフェミニズムの多様な展開を新たに発見することができるだろう。

1 2019年の本書出版後の2020年7月に当時ソウル市長であった朴元淳が20代の女性秘書へのセクハラで提訴され、その直後に自殺した。この事件は韓国の女性運動第1世代をも大きく揺るがす展開を見せている。